



1994年(平成6年)

1月号(No. 584)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価一部 150 円

目次

平成5年度年次晩餐会	1
'93 全国支部大会	3
海外の山	4
青森支部発足	5
受賞・表彰	5
計報	5
東西南北	
外国人登山者の実態	6
富山藩主の金剛堂山登山	6
ウエストンとオベリスク	7
早池峰山・初冬	7
図書紹介	8
自然保護随想	9
報告	
自然保護の洋書を選んで	10
第1回写真展	10
晩餐会懇親山行「弘法山」	10
山研改築収支報告	11
戦前の北アルプス	11
山の破壊を見る	12
皇居一周マラソン大会	12
新入会員	13
住所・住居表示変更	13
会務報告	14
ルーム日誌 インフォメーション	
会員異動	

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時

日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時平成五年度年次晩餐会
三笠宮寛仁殿下が初のご出席

平成五年度の年次晩餐会が旧ろう四日、東京・品川の新高輪プリンスホテル国際パミール三階の大宴会場「北辰」で開かれた。

この年次晩餐会には、過去六年連続ご出席の皇太子殿下はご欠席となったが、三笠宮寛仁殿下が初めてご出席、メインテーブル・富士にお着きになった。そして全国各地より六百五十名の会員が、名山名を付した六十六の円卓を囲んだ。

■「九十周年に向けて」と会長挨拶

式次第は小倉茂暉総務担当常務理事により、円滑に進められる。

挨拶と会の現況報告に立った藤平正夫会長は、「山研・ナムチャ合同募金応募について、まず会員の皆様に感謝したい」とし、大要次のように述べた。「頭痛のタネであった山研募金も順調に推移し、日本山岳会の底力を痛感している。山研もオープン以来、当初の予想どおり利用されている。今後とも我々の登山研鑽の場として育てていきたい。

会の現況では、二十三番目の支部として、青森支部が新たに誕生した。

当面の問題点については、会報九月号(五八〇号)に提示したが、会も再来年に九十周年を迎える。この九十年

という歴史の重みは相当なものだが、反面、現有会員五千二百名、支部数二十三という巨大組織の硬直化が目立ち、歴史の垢が溜まったことも否定できない。前会長時代に、組織改正と内部体制の整理に取り組んだが、ナムチャ再挑戦、山研改築、HATJ応援という三大プロジェクト達成に、エネルギーを取られたのが実情だ。

次年度はこのような巨大プロジェクトがないので、九十周年事業をいかに成功させるかということになるが、九十周年事業は百周年へのステップとして捕らえ、衆知を集め、いろいろなアイディアをぶつけながら現在進行中である。どれを優先させるかが今後の課題であろう。

大きな問題として若年層の比重の低さが上げられる。中高年齢層の蓄積した実力は認めつつ、若年層の強化を図

ることが百周年へのポイントとなる。日本の山への外国人登山者が、考えられなかったほど激増している反面、受入れ体制の不備は明らかである。韓国のハンゲル文字による標識がないのも一例である。これは文化摩擦だ。本席には台湾から蔡禮樂会員(中華民国山岳協会会長)も出席されたが、お互いフランクに話し合って国際化に対応したい。

環境問題については、登山は広義の環境破壊であるという自覚の上で考えるべきである」

■名誉会員・永年会員の紹介

小倉茂暉理事から、平成五年十一月十五日現在の在籍者数は五千九百七十七名、平成四年十二月から平成五年十一月の新入会員は三百三十三名、支部数三十三と現況報告のあと、物故会員三十七

名の氏名が読み上げられ、物故者黙禱に入った。

続いて名誉会員・永年会員の発表が行われ、山田二郎会員（前会長）が名誉会員に。永年会員は柴田重太郎、片山英一、酒井俊雄、橋爪幸達の四氏。山田二郎会員と当夜出席の片山英一会員には、藤平会長からそれぞれ名誉会員、永年会員章が手渡された。

山田二郎新名誉会員は、「今年六月、富士山にスキーを持って行って酔狂といわれた。藤平会長から名誉会員に内定したといわれたとき、まだ若過ぎると辞退したのだが、口がうるさいので棚上げされたのではないかと邪推している。

私はうかつな男で、会長を引き受けたときも、事の重大さを考えず、あとで会員名簿の歴代会長を見て驚いた次第だ。今後は名誉会員の仲間に入られて、その重荷を背負うのはしんどいと早くも危惧している」

片山英一永年会員は、「健康で長生きしたおかげ。私が入会した昭和十八年一月は、第二次世界大戦も泥沼状況で、上高地に入るのに島々でバスを待っていたら、登山服姿を見て、この非常時に非国民だと蔑みの目で見られ、バスに乗れなかったこともある」と、入会当時の時代背景を語られ、次いで「昭和二十一年六月に復員、家財は戦

災で失ったが、戦火の中、母がただ一つ守ってくれたのが二二二一番のこの会員章です。母は私の山の理解者であつたし、この会員章は私の宝です」と声涙ともに下る条りでは、会場に惜しみない拍手が沸き上がった。

会長特別表彰は脇坂順一会員。今年八月、八十歳にしてモンブランに登頂、四十八歳以降、三十二年間で海外百五十座登頂の偉業を果たされ、同年齢層に夢と希望を与えた功績によるもの。

脇坂順一会員は、「振り返ってみると、曲がりなりにも夢を追い求めた。一つの夢が達成されると次の夢。そのため精進を重ねた。五年前に八十歳のお祝いを、ヨーロッパアルプスの最高峰でと考えた。足が動く限り山を続けたい。次の夢の米寿に向かってさらに精進を重ねます」にも大拍手。

次いで海外から来会した台湾の蔡禮樂会員、韓国の孫慶錫会員（韓国山岳会副会長）が紹介された。

■本年度の新入会員は三百三名

会食に先立ち、アデレードから馳せ参じた中村テル名誉会員が、「私のような若い者が」と切り出しつつ、「遠い南半球からきたので、やらせてくれるのでしょ。皆さん、いつまでも若々しく山へ行きましょ。皆さんの健康と山岳会発展を願って」と乾杯音頭。

やがて会食となり、六十六のテールは、理事、監事、評議員、支部長、委員会委員らがテーブルマスターを務め、なかなか歓談が広がっていったのはいうまでもない。

この会食中には、文化勲章受賞の宇宙物理学者、小田稔会員や、親子孫三代にまたがる宮原利重、岳子、敬子信濃支部所属会員が紹介された。

また、新入会員三百三名のうち、当夜は七十一名が出席、壇上に紹介されたが、代表として挨拶に立った星野幸太郎会員は、「歴史と伝統のある日本山岳会に入会し、大きな喜びと感激にむせています。学生時代に山に入つて、その厳しさ、偉大さ、美しさ、そして人間同士の和を学んだが、日本山岳会に入会し、オリエンテーションでは、会の幹部の方から温かい歓迎の言葉をいただき、また会の組織などについてもお話しをうかがい、心の大切さを感じました。今の時代は心の時代。この心を大切に二十一世紀に向け、新しい時代は新入会員に任せてもらいたいとの自負のもと、積極的に会の活動に参加したい。同期入会者による同期会を結成します」には、またもや大きな拍手。

二十三番目の支部となった青森を始めてとして、各支部の支部長、支部会員も紹介される。

■名残を惜しみつつ散会

三笠宮寛仁殿下ご退場後も、出席会員の会場内歓談はなおも続いたが、やがて閉会のときを迎え、参会者は名残を惜しみつつ、一九九三年版「山岳」を手に、巷に散ることになった。この余韻は翌日の懇親山行「弘法山」に引き継がれた。

なお、晩餐会に先だって、隣接の「慶雲」の間では、恒例の簡易バーが開設されたほか、アルパイン・スケッチクラブの同好会を中心に会員有志による「私の山の絵」展も開催、好評を呼んだのを始め、新製品のビックル型バッジ（JAC文字およびマーク入り）などJACグッズコーナーも設けられ、売れ行きは好調だった。

最後に、設営から運営に苦労された年次晩餐会準備委員会の皆さんに、誌上からお礼を申しあげます。

【新名誉会員紹介】

山田二郎（会員番号三四七三）大正十一年四月十六日生れ 慶応義塾大学卒 主な山歴は一九五三年第一次マナスル隊参加 一九五四年第二次同前 一九六〇年慶大創立一〇〇年記念ヒマルチユリ登山隊（隊長） 一九九二年日中合同ナムチャバルワ登山隊（総隊長） 一九九二年前同（総隊長）



第35回木暮祭 碑前にて

〔新永年会員紹介〕

柴田重太郎(会員番号二二一四) 明治四十四年十一月十四日生れ 八十二歳
香月尋常高等卒 紹介者〓柚木、江口
片山英一(会員番号二二二二) 大正六年五月六日生れ 七十六歳 神戸山岳会会長(前) ブナを植える会会長

紹介者〓故津田周二、故島田真之

酒井俊雄(会員番号二二五五) 大正七年九月二十五日生れ 関西支部所属
橋爪幸達(会員番号二二六四) 明治三十七年七月九日生れ 紹介者〓今野大三、小野幸

(高田真哉)

’93全国支部大会 錦繡の増富に木暮理太郎翁を偲ぶ

山梨支部

■盛大に全国支部大会を開催

十月二十三日、夜、山梨県北巨摩郡須玉町立増富小学校体育館にて、全国支部大会の開会式を行う。北海道から九州と集まる者百七十名。

前島信山梨支部委員の司会のもと、山寺義男委員の開会の辞、中村純二副会長・主催者代表、大沢支部長が主管者として挨拶を述べる。

次いで、八巻恭介須玉町町長、山梨県山岳連盟の高室陽二郎会長のそれぞれの来賓祝辞と続く。内藤順造委員からスケジュールの発表があり、二塚謙三副委員長の閉会の辞で終わる。

引き続き、名誉会員・望月達夫氏による「木暮理太郎翁をめぐる想い出」と題する記念講演ということになっていった。ところが、同氏が急に体調をく

ずされ出席不能。急遽、山村正光委員が講師紹介をかねて原稿代読となる。

望月名誉会員は『山岳』の編集を二十年間担当されたが、一番大切にしたのは「追悼欄」であったという。講演内容は、稿を改めるが、結論は、想い出というより、木暮先生が終始一貫山岳会の伝統を守りながらも、その近代化をはかるべく努力してこられた方であると、先生と日本山岳会との関わりについて述べられている。

■樽酒と新ワインで前夜祭

さて前夜祭は、大沢支部長寄贈になる(大沢支部長は大沢酒造の会長)「太冠」四斗樽の鏡めきから幕を開ける。八巻町長、高室県岳連会長、中村副会長、出席者代表、最高年齢八十五歳、信濃支部の宮原利重氏、古屋学而支部委員長が大きく槌を振る。乾杯の音頭は、前年の開催地、福岡支部の吉村健児支部長がとる。

須玉町食品協同組合の心づくしのオードブルを肴に、豪快に樽酒を酌みかわす。その間、舞台では地元町民連による民謡や踊りがあり、勇壮きわまる甲斐源氏太鼓の連弾、草笛の演奏と座を盛り上げる。熱燗のヤカンを持って回り、古屋委員長も、自社のシャスラーワインの新酒をふるまい、夜は更けていく。

外は今秋最低の気温、月も星も明日の天気約束している。名残は尽きないが、二十一時にはお開きとなり、手配のバスにて、増富ラジウム温泉郷の各旅館に分宿する。聞くところによると、宿でも、遅くまで二次会の宴が開かれていたという。

■百四十人、瑞牆山に登る

明けて二十四日、午前五時、地は真っ白の霜、天には大きな星のまたたき、快晴である。瑞牆山荘まで車に分乗、五班に分かれ、山梨岳連の山岳指導員をリーダーに、百四十人が隔時出発する。富士見平まで、ブナ、ミズナラ、カエデ、モミ、カラマツの樹林帯を上がる。富士見平から天鳥川に向けてゆるく下る。一般登山者の数も増え、シャクナゲの中の岩場を縫うように、ゆっくりと登って行く。何せ、今回の参加者の平均年齢が六十五歳、マイペースで高度をかせぐ。

各班につけた移動無線が大活躍して時間調整をするので、さしものせまい山頂も大した混雑もなく、無事全員登頂。若干風は強いものの、快晴。北アルプス、浅間山、近くは小川山、金峰山など大展望を満喫、往路をもどる。

■散策組は二等三角点・木賊峠へ

一方、散策組は二十六名、朝八時半

に、車に分乗して木賊峠を目指す。峠直下を右に檜山林道をわずかに入る。南に藪っぽい尾根を上がる。右手カラマツの伐採地、左手はナラ、クヌギの中の踏跡をたどる。背後に、金峰山、瑞牆山はうに及ばず、遠く浅間や鹿沢の山々、右手には八ヶ岳、南アルプスが見え出す。

ふと、足下にナラタケが霜の中に見える。こうなれば、景色もさることながら食い気が優先する。やがて頂上。点名は増富山、山名は袴腰、カラマツの中で展望は今一つ。西寄りに少し下ると、南アルプスが茅ヶ岳の上に並立している。

はや、登山組第一班が下山を始めたとの無線がとびこんでくる。「瑞牆山組もお天気で大喜びだろうが、こちらは二等三角点、あちらより格が一枚上である」などと自画自賛。

往路をもどり、木賊峠に移動、正面の富士山は庄巻。最近、山梨県で新富岳百景に選定した推奨ポイントである。次に、池ノ平林道を下り、奥秩父の盟主、金峰山を正面にして、記念撮影を行う。紅葉、黄葉の中、落合にもどって金山平、有井館にて昼食。

午後は、有井館裏手の木暮翁のレリーフを拝し、左に尾根道を上がる。レリーフをはめ込んだローソク岩を過ぎガラ場を二度横切って、信玄の時代

海外の山

冬の サガルマータ 南西壁 ついに陥落

江本嘉伸

何かと話題の多かった「エベレスト登頂四十周年」だが、暮れも押し詰まった十二月二十日、ネパールからビクニユースが飛び込んだ。

サガルマータ南西壁の冬期初登攀を目指していた八木原闇明隊長（四七）率いる群馬岳連隊が、ついに執念の登頂をなしたのだ。

サガルマータのあるクーンブ地方では、九三年秋から「ルート一隊」の原則が適用され、隊員数も「一隊五人、最大でも七人」の制限がある。八木原隊は登攀隊長・名塚秀二（三九）を隊長役として、他に六人の登攀メンバーで難壁に挑んだ。

出発前、「二週間で勝負をつける」と隊員たちが語っていたのを裏付け、スピード溢れる登攀だった。

十二月一日、五三五〇メートルのBCから行動開始、その日のうちにC1（六〇二〇メートル）、翌二日にC2（六五〇〇メートル）を設営し、三日には南壁軍艦岩直下六九〇

メートル地点に仮キャンプを、そして九日、七六〇〇メートル地点にC3を建設した。

十三日には前回の最高到達地点だった八三五〇メートル地点にC4を設け、十五日、副隊長の尾形好雄（四五）と星野龍史（二六）パーティーが南峰ルンゼ（八六〇〇メートル）までのトラバースルートの工作に成功、頂上をうかがう体制にはいった。

十八日午前八時四十五分、第一次アタッカーの名塚と後藤文明（二八）の二人がC4を出発、前日までのルート工作のおかげで、午後一時には、一般ルートである南峰のコルに出た。午後三時二十分、烈風の中をサガルマータ頂上に立った。エベレスト登攀史に新しい一ページが書き込まれた瞬間だった。

登頂基地として、C4がフルに活用された。頂上をおとした二人が一泊して下山した翌十九日、田辺治（三三）と江塚進介（三三）が、いれかわってこのキャンプにはいり、二十日、登頂に成功。さらに二十二日も尾形、星野パーティーが三次アタックを成功させた。胸部の痛みで断念した佐藤光由（三三）（八五年秋サガルマータ登頂者）を除いて、七人

の隊員のうち六人が登ってしまったのである。

「ほっとしました。二度目の挑戦を、私たちを信頼して全面的に応援してくれた人たちに、これで報いることができた、と」

カトマンズに下りた八木原は、国際電話で、そう言った。大きな仕事を終えた人間だけが味わえる、抑えた喜びが、口調から感じられた。

成功の理由として、八木原は全員が、九一〜九二年冬隊の経験者であったことに加え、「チヨオユーでの順化」をあげる。

サガルマータへの挑戦の前に、彼らはチヨオユー（八二〇一メートル）に行き、十月八日、十一、十二日の三日間で、八木原以下全員登頂を果たしている。その高度順化体験は、大きな力となったであろう。

しかし、おそらく成功の最も重要な要素は、一九七一年のタウラグリIV峰偵察以来、常に群馬岳連隊の中心にあり続けた八木原闇明のリーダーシップと、メンバーの彼への信頼であった、と思われる。

あの山田昇はじめ、群馬は強い登山家たちを生み出し、失ってきた。その積み重ねがいま、結実した。

から続いていた、金鉦の坑口二か所を訪ねる。

■木暮祭と甲州名物『ほうとう』

午後二時から、瑞牆山組を含めて全員集合、第三十五回木暮祭を碑前にて行う。三枝昌彦県岳連理事長司会のもと、八巻町長、中村日本山岳会副会長が挨拶を述べる。
献花などセレモニーのあと、すぐ下の木暮翁ゆかりの有井館の前庭に移動

受賞・表彰

吉田宏会員

ブロンズ・ウルフ章受賞

本会元評議員吉田宏氏(会員番号八〇二六、日本ボーイスカウト連盟理事、国際コミッションナー、世界スカウト財団理事)は、旧年六月、パシフィックで開催された第三十三回世界スカウト会議の席上 Bronze Wolf Award(最高栄誉章)を受賞された。
この栄誉章は、スカウト活動の偉大なパイオニアであったバデル・ポウエル卿に、一九三五年に贈られたことに始まる。受賞の理由としては、日本連盟と世界財団の架け橋として貢献されたこと、個人的にも日本連盟の振興と世界財団に対する支援活動が上げられている。

する。地元の方々のご好意によるきのこ入りの甲州名物『ほうとう』を大鍋二つ平らげてしまふ。酒、ビール、ワインにブドウなどと共に、錦繡の金峰山を間近に仰ぎ飲むつくす。
三々五々、車で宿に帰り、来年の再会を約し、流れ解散となる。帰りの臨時バスの手配に若干のいきちがいがあり、参加者の予定が狂う。関係者に迷惑をかけた点、誌上を借りて、お詫びする次第である。

同氏は現在、ヒマラヤ環境トラスト(HET)の顧問として、HAT-JとHETのパイプ役としても活躍されている。(Y・M)

丸山彰会員

大町市・市政功労者表彰

丸山彰氏(七十六歳、会員番号三〇九八、大町山岳博物館顧問)は、去る十一月三日、スポーツ教育の振興を通じ、大町市の発展に寄与されたとして市政功労者に表彰された。
氏は大町中学、同南高校山岳部長として多くの人材を育て、多年にわたり安全登山、スキーの普及に尽力されてきた。エベレスト登頂者の平林克敏会員も、氏の薫陶を受けた一人である。(Y・M)

再建(?)間もない山梨支部として初めての大会であった。この大会を通じて、支部員間の意思の疎通がより深まったことは望外の収穫であった。まだ組織力が弱いので、山梨岳連を始め、地元各種団体には多大の物心両面にわたるご援助、ご協力を仰いだこと、芳名は略させていただきますが、心から感謝の念を捧げる。(山村正光)

日本山岳会二十三番目の青森支部が発足

東北、北海道で支部がないのは青森県だけだったが、このたび全国二十三番目の支部として、会員二十九名で発足した。

設立総会は去る十一月二十日、青森市で開かれ、本部からは藤平会長、松田前副会長、小倉常務理事のご臨席をいただき、県内会員二十二名が出席した。総会では、松島発起人代表の挨拶に続き、支部設立同意書報告、支部規約審議、事業計画審議、予算案審議のあと、役員が選出された。

支部長 松島静吾、副支部長 作見徹、前田中庸、委員 下山寿、加賀勝、木村郁夫、根深誠、松田要悦、中村勉、監事 吉田彌、鈴木一好、事務局局長 中村勉(〒031八戸市青葉二丁目二二二〇 〇一七八―二二五六一三)

その後、藤平会長から「日本山岳会の現況について」と題して記念講演があり、また、宮城、秋田、岩手支部からも多数の参加を得て「設立祝賀会」が盛大に行われた。(支部長松島静吾)

計報

三島昌夫氏

(会員番号六一五 終身会員)

三島会員は、一九九三年十月十七日(日)十八時頃、カトマンズのホテル・ヒマラヤにて急逝された。

同氏は、立教大学チヨモロンゾ登山隊・学術調査隊の支援隊長として、登山隊のBC四九〇〇メートルまで登り、隊員宛てのメッセージを届けるなど、支援隊の責務を果たす。二日間のBC滞在中は快晴に恵まれ、チヨモロンゾはもとよりチヨモランマ、マカールのヒマランジャイアンツの眺めを満喫して下山。予定どおりにカトマンズに帰着、ホテルに入る。ビールで乾杯を約した時間にこないので、部屋にいったところ既に昇天。享年五十八歳。遺体は、現地地茶毘に付され、夫人、子息、息女に見守られて成田に帰る。
告別式は、十一月十三日(土)十四時、立教大学内諸聖徒礼拝堂にて施行された。心から冥福を祈る。

(中村太郎)

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。



カット 中村あや

穂高岳で見た 外国人登山者の実態

石田稔郎

去る七月二十二日、北ア南部のある山小屋に百二十人ほどの外国人パーティーが宿泊し、翌日、約四十人は涸沢から下山、約八十人は重太郎新道から上高地に下った。そのあとから下山した私の友人(当会員の)パーティーは、おびただしい弁当の残骸が紀美子平に投げ捨ててあるのを発見、これを必死になって回収した。

「山」五八〇号には、大森理事が「四カ国語の北アルプス自然保護・安全登山案内書」の作成を報告され、「山と溪谷」や「岳人」でも紹介されている。このパンフレットがもっと早くでき、有効に配布されていたら、また違ったかもしれないが、この穂高の大パーティーは旅行業者が募集したツアーのようで、業者の団体から会員業者に伝えるような手配も必要だろう。また、

パンフレットのこの外国の文字はちょっと小さいようで、これでは読んでもくれないのではないか。

なお、この外国人パーティーの国では、ゴミの持ち帰りを指導していないのか、私の経験でも、この外国のある山の避難小屋の中にポリ袋が山のように積まれ、ゴミの集積場のような状態。日本でも富士山や二上山の実態を見ると誉められたものではないが……。

この外国人が宿泊した小屋は、備品の盗難ばかりを心配し、弁当の空き箱の持ち帰りを要請しなかったようだ。ゴミ持ち帰りを徹底させたいと思う。

富山藩主の 金剛堂山登山について

廣瀬 誠

「山」五八一号誌上の岐阜支部だよりに、金剛堂山について記されていて、興味深く読ませていただいた。文中「山頂にはなぜか富山藩主のあまり上手で

ない歌の碑が建っている」とある。「なぜか」と疑問視されているので、そのいわれを明らかにしておきたい。

十代富山藩主・前田利保(一八〇〇〜一八五九)は、富山藩の重要産業であった売薬業とのかかわりもあって、本草学(主として植物研究)に熱中した。藩主の職を辞した後は、自由に山野を跋渉し「草薺増長止ム事ナシ」といわれたほどで、『本草通串証図』のような江戸時代第一級的美麗、かつ精密、正確な木版色刷植物図鑑も刊行(五巻まで刊行。火災のため中絶)した。

利保は登山を愛好したが、越中の立山はじめ北アルプスの山々はすべて加賀藩領で、富山藩主としては、そこへの登山は困難な事情があったのである。(楽は下にありで、藩士ならば立山登山も自由であったが、「主」となる、やはり遠慮すべき筋合いだったのであろう。逆に加賀藩主は参勤交代の旅で、富山城下町を避けて回り道している)。

となると、富山藩領の最高峰は金剛堂山(二六三八メートル、越中名、西白木峰)であった。利保はこの最高峰頂上をぜひ極めたく、嘉永六年三月二十二日(西暦一八五三年四月二十九日)残雪期の登頂を敢行した。金剛堂の名のとおり修験の山で、役行者が山を開いた時、熊が現れて案内したという伝

説を持つ。しかし当時、修験は廃絶して久しく、全く登路がなかった。

利保は大長谷川の庵谷(海拔五四〇メートル)を根拠地とし、谷を遡って尾根にとりつき、雪を踏み、ブッシュをかき分け、難渋しながら登行した。中途で従者(藩士十六名)「戦慄シ」、ふるえあがって尻込みしたが、五十三歳の利保は「衆ヲ励マシ」「我先ヅユカン」と、先頭きって突き進んだという。

このようにして藩領最高峰を極めた感激を、利保は後世まで記念したく、翌安政元年五月二十日(一八五四年六月十七日)その歌碑を頂上とベースキャンプの庵谷の二か所に建てさせた。従来、看過されてきたが、この登頂は日本登山史に追加特筆すべき壮挙であらう。

その歌は「飛驒信濃木曾の峰々みな見えて西はのこさぬ白木やまかな」で、その壮大な山岳景観に対する感動である。ミネミネナミエトミ音を重ねた上句の調も美しい。

その「みな見えて」の「て」が「而」を崩した変体仮名であるため、しばしば「る」と誤読されている。「みな見える」では、ここで調が中断し(いわゆる腰折歌)、しかも口語体になって、子供の物言いのような拙劣歌になってしまう。「あまり上手でない」という

評定は多分そのためであろう。
ただこの歌の第四句「西は残さぬ」が難解である。その裏には政治的事情が介在しているらしいといわれている。白木峰・金剛堂山の南側の広大な地が、富山領か飛騨領か多年紛争の地で、江戸幕府で裁判中、初代富山藩主が急死（憤死？ 毒死？）し、その後急転直下、富山側の敗訴と決した。そのいわくつきの地であった。

早池峰山・初冬

大橋克也

微かなる 兎の尿も 標べなり
初冬の峯に 雪踏みくれば

野兎の 尿の色さえ 懐しむ
ラッセル苦しき 雪の高嶺で

早池峰の 雪氷の荒びに 登りきて
生きものの臭いに 敏くなりいる

雪氷の降路の標べ 吹き千切れ
仲間を呼べども 風に消されぬ

新雪の 酷しさ山に 求めきて
何故か兎の 尿なつかしむ

また加賀藩・富山藩は同じ前田氏で宗藩・支藩の間柄であったが、幕末、両藩間にもめごと多く、宗藩は支藩を監視し、万事厳しく締め付けていた。その政治的憤懣をこめて、西の金沢に對して「西は残さぬ」と晦渋な表現をしたのであろうという。金剛堂山は富山藩領・加賀藩領・飛騨藩領の境界点に立つ山、その特別の地点に利保は特別の思いを込めてこの碑を建てさせたのだという。

私は、西の白山連峰の山々も残らず見渡したと山岳大観に陶醉した心情を歌ったものと解しているが、以上のような政治的見解もあることを記しておく（下句は難解でやや拙い）。

歌碑は花崗岩製、台石二段を重ねて高さ約二メートル、相当な重量で、道なき敷山へ碑石を運び上げたのは、容易ならぬ作業であったろう。そのため敷を切り開いたらしく、その作業の折の『峯通り刈明ヶ行道略図』が残っている（富山県立図書館蔵）。

なお利保は、明治書院の『和歌大辞典』、桜楓社の『和歌文学辞典』などにも独立項目として載せられた当時有力な歌人であった。

また利保に従って登山した藩士藤沢音人光周は嘉永七年、木版彩色の『奇草小図』を刊行した。ごくささやかな小型本であるが、京都大学名誉教授、故

上野益三博士がこれを紹介し、その意義を強調された。多分、江戸時代唯一の高山植物図鑑であろう。

*

付記 庵谷の碑は樹間に苦むしているが、頂上の碑は清澄の山気に白く輝いていて、今建てたものかと思うほどである。両碑とも台石に従者十六名の名が刻まれている。

ウエストンとオベリスク

田畑真一

昭和六年の山梨県山林会発行の『南アルプスと奥秩父』の中に、鳳凰山の「峰・地蔵岳（二八四〇メートル）」に聳えるオベリスク状の巨岩について、次のようにみえている。

「方尖石塔とは古代埃及（田畑注、エジプト）時代、神殿の門前左右に立てられた方錐形の石柱で、現に紐育（同注、ニューヨーク）の中央公園及び倫敦（同注、ロンドン）のテームズ河畔に建てられている。地蔵岳の地蔵仏はその形態がほぼ方錐体を示すので、世人はこれをオベリスクと呼ぶに至った」

この記事の前半部分については何も言うことはなく、至言である。ただ、後半部分、つまり「地蔵岳の地蔵仏」

以下の一条については補足を必要とする。それは大づかみに見れば、これで妥当であるが、厳密に見れば必ずしも妥当ではないという結論である。というのはオベリスクと呼ぶきっかけを作った人物はウエストンに違いなく、私はこれをウエストンの「極東の遊歩場」の中に見る。

「その最後の方尖塔のようなどころは、付近の谷間の農民に地蔵仏という名で親しまれている。これは地蔵の像に想像以上似ているからである」

これはウエストンの明治三十五年に北岳（三一九二メートル）への登頂を目指し、甲府方面へやってきたときの一事である。当時は、まだ「オベリスクのような」である。この種の表現で述べる「極東の遊歩場」以降の文献についても私はあげることができる。たとえば昭和十一年に発行された小島烏水の「アルピニストの手記」である。この中には「鳳凰山の例のオベリスク型岩石」とみえている。ただ、後年になるにしたがって諸文献は、多くは「オベリスク」という表現になってくる。こんなわけで世人がオベリスクと呼ぶに至る前、すでにウエストンが「オベリスクのような」と呼んでいた点を強調しておきたい。ちなみに関係の拙稿として「ウエストンと地蔵岳のオベリスク」（『新山梨』六十三）がある。

図書紹介



カット 中村あや

大和久震平著

『古代山岳信仰遺跡の研究』

六〇〇ページを超える大部の山岳宗教研究書。著者は日光市史編纂(考古学)にたずさわり、男体、女峰など日光山地の山頂宗教遺跡の調査を行ったが、著者の遺跡研究はこのときの男体山をキーポイントとして、全国的に広がっていく。そして東北関東一円、中部山岳、西国四国、北九州の山々と、驚くほど広範囲にわたって踏査している。日光二荒山碑真疑問題や、勝道上人の男体登拝が蝦夷征討と関係があるとの伝説などは、歴史学上にも興味深い。この本は文献専証という荷物をザックに詰め込み、自らの足で探索して書いたもので、登山愛好者の立場から見て、調査の重荷がずっしりと感じられる労作である。

著者は調査のため、中年過ぎてから登山の手ほどきを受け、ビッケル、アイゼンを使う冬山の指導も受けている。

そのお陰で、調査はほとんど単独行だったが、石槌や妙高で雪に見舞われても無事であったという。「山は登る」とより引き返すことに勇気がいる」ことを体験したと書いているが、普通の登山とは異なり、この言葉はより深い意味を持っているに違いない。

名著出版発行 平成五年秩父宮記念
学術賞受賞 一二、〇〇〇円
(伊佐九三四郎)

『広島県スポーツ登山・半世紀の歩み』

五十周年記念誌

昭和十六年に創立された広島県山岳連盟は、原爆投下にあい壊滅状態に陥りながら再起を果たし、平成三年、めでたく五十周年を迎えるに至った。本書はその創立期からの、組織の運営、登山活動を克明に綴った記録の集大成である。

第一部の活動概況から、第九部の年表・資料まで、九つの項目に分けて報告されている。一三四六メートルの敷山を最高峰として点在する県内の山々での、全国大会、県大会、各種競技会、普及活動としての市民ハイキングなどの、企画、準備、運営状況、それらに伴う安全対策、登山技術、遭難対策、自然保護対策などの講習会が、詳細か

つ具体的に報告されている。こういった会を運営されている方には大いに参考となるであろう。

一九九二年十一月十日 広島県山岳連盟発行 二四一ページ(飯田 進)

A・チェリー・ガラード著

加納一郎訳

『世界最悪の旅』

悲運のスコット南極探検隊

原著は一九三二年、全訳は四四年に出版されたが、その後は抄訳しか手に入らない時期が続いた。訳者の著作集の一冊として一九八六年、実に四十二年ぶりに全訳が再刊され、九三年に文庫本になった。極地文献として名高い本書の全訳を入手する機会が得にくかっただけに、文庫による全訳の再刊はありがたい。

著者のチェリー・ガラードはスコット探検隊最年少の科学隊員で、動物学助手として参加した。二年八か月におよぶ探検隊の全容が、隊員の日記や手紙を随所に織り込み、時間の流れにそって語られていく。序章で南極の歴史と探検隊の概要がまとめられ、大部の探検記録を把握する助けとなっている。基地生活とともに始まった食糧配置旅行での海水流出による危機、想像を絶する厳寒と暗闇の「世界最悪の旅」、

第二帰還隊エバンスの衰弱とその救出、北方部隊(キャンベル隊)の予期せぬ越冬、一トンデボまでの南進隊サポートと待機、還らぬ五隊員……。二度目の越冬、そして南進隊の搜索。遺体とともに発見されたスコットの日記と遺書が空白部を語っていた。隊の重要な場面のほとんどに立ち会うことになった著者には、スコット隊の語りべとなるべき必然性があった。著者の手で十年を経て、隊の全貌が明らかにされた。

終章で、探検隊の問題点に客観的考察が加わり「探検とは、知的情熱の肉体的表現である」で結ばれている。

巻末の行程表は隊の動きを図表化するのに役立つ。スコットの「南極探検日誌」全訳(中田修訳)を併読すれば、スコット隊への理解はさらに深まるだろう。

一九九三年二月 朝日文庫(朝日新聞社発行) 九九二ページ 一、三〇〇円
(宇都木慎二)

荒賀憲雄詩集

『霧の中に』

標記の詩集は発行されて大分日がたつので、すでに山関係のものだけでなく、各所で紹介されている。このため、その中身については多言を要しないだろう。ぜひその詩の一端をという向き

は、本会報五六八号に載った荒賀会員の「雲の塔」をご覧いただきたい。ここではこの詩人の詩が生まれてくる背景の一部を簡単に紹介したい。

著者は京都を代表する詩作者の集団の一つ「ラヴィーン」の同人で、京都府立洛北高校で国語を教えていた。一九九三年に定年退職するまで、加納一郎、今西錦司という錚々たる岳人を生み出した府立一中山岳部のよき伝統を現役部員たちに引き継がせようと、アキシデントによる廃部寸前の状態の同校山岳部を、OB会設立で間接的支援になりうるまで育ててきた。

進学校でもある同校の中で、さまざまの圧力に抗しながら、山に登り山を謳った荒賀氏の詩には、単なるロマンティズムで終わらない、現代風の山の詩が作り上げられているといえるように思う。

一九九二年 文京書房発行 一〇一ページ 二、二〇〇円 (岡沢祐吉)

柴崎 徹著

『宮城の名山』

「山の魅力は尽きない……」という序文で始まるこの本は、いわゆる案内書の域を越えて、山そのものの個性を適格に感じさせてくれる好著である。

宮城の背稜を代表する栗駒、船形、

蔵王を新しい角度で捕らえて描写しながら、今まで注目されていない山や谷に光を当て、眠っていた峯を目覚めさせている。五十ほどの宮城の山の一つ一つに、さわやかな驚きを覚えるほどである。そのみずみずしい驚きの源泉は何なのか。何よりもまず、登ることと書くことが渾然と一致しているからではないかという感想が浮かぶ。

例えば戦後しばらくの間、径も途絶えていた二口峠周辺の盟主である神室岳は、道がなかったことがかえって魅力があったと述べている。そして高校時代の真冬に登った神室山頂で見たプロッケンの妖怪の思い出や、密生したチシマザサの猛烈な敷を漕いだ斜面に今は同じルートで道がつけてあるとのくだりなどが、いきいきと迫ってくるのはその現れであろう。

ここに選んだ山々への著者の思いは限りなく深いのだが、決して過剰にはなっていない。むしろ、紹介できなかった多くの山に済まないとの思いを語り、登る人それぞれが、自分の名山を目指してほしいと結んでいる。そこには、自然の底知れなさと同様に、そうしたもののへ謙虚に対峙しようとする著者の姿勢が現れているのであろう。

一九九二年八月一日 河北新報社発行 一六七ページ 一、六〇〇円

(大橋克也)

自然保護随想 冬季五輪と 開発

関塚貞亨

今年二月に、冬季オリンピックが開かれる。会場となるリレハンメル

が、環境問題にどのような取り組みをしているのか、新聞情報はまったくないが興味を持って見守っている。二年前の冬季五輪が開かれたアルベールビルは、新聞、テレビとも環境保全面からは、ほとんど取り上げられていなかったが、断片的なニュースは、いかにもフランスらしい堅実な取り組み方がほの見えるものだった。

例えば、会場近辺の設備のよい宿舎は選手に提供したためらしく、サ

ービスをする側の従業員宿舎は「暖房もほとんどないところに、寿司詰めされて、不満が高まっている」や「選手の宿舎から競技会場への道が狭く、渋滞がちで、時間がかかる」などの記事は、オリンピックのため特別な開発はほとんどしないで、終了後、再び静かなリゾートに戻るうとする、しっかりした思想が伺えるものだった。

また、滑降コースの中間のところ

が極端に狭く、難しいコースとなっていたが、これは山を削らずに、自然のままコースを造ったためで、環境保全を優先した立派な計画だった、といえよう。

一方、一九九八年に開催される長

野オリンピックの取り組み方はアルベールビルとは、全く正反対のように見える。いま長野は五輪に便乗して、県の大部分を一大観光地として開発しようとしているのではない。山岳会や自然保護団体の反対によって、岩菅山のスキーコース建設は中止になったものの、東館山コースと志賀高原のホテルを結ぶための各道路は、奥志賀林道を含めて、拡張工事が計画されているという。

五輪会場としては実現しなかったとしても、道路が拡張されれば、岩菅山がスキーゲレンデになるのは時間の問題ではないか、と思われる。したたかなものである。

五輪開催に関係のない新安房トネルの開通も一九九八年という。世紀末の冬の上高地は、騒々しくなりそう。札幌五輪の恵庭岳復元が遠い昔話となりそう。

岡島成行氏が図書紹介

『自然保護の洋書を選んで』

自然保護委員会

昨年の夏前に、自然保護関係の洋書五十四冊が本会図書室に入った。そのリストは会報「山」第五八一号に掲載されている。十二ページ十行目から十三ページ十五行目までがこれである。

これらは会員岡島成行氏が滞米中に選んでくださったもので、費用は自然保護委員が勤労奉仕で得た謝礼の中から支払われた。

十月二十二日に同氏により、この図書紹介をしていただいた。その概要は次のようである。

五十四冊の大部分はネイチュアライティングの範疇に入るものである。この言葉は日本では聞き慣れないが、アメリカではここ二十年ほどの間に人気が甚だ高まっている。

自然と人とのかわりについて深い考察があること。自然の観察力。自然描写が美しいこと。この三分野で優れていることがネイチュアライティング

の条件である。

今度の購入図書の多くは古典に属し評価は定まっている。

この中にジョン・ミュアの著書は八冊ある。彼は、まだ秘境だったシエラネバダの山々やアラスカをたった一人で探検し続け、自然の美しさや大切さを訴えた。

エドワード・アピの『砂の楽園』に「温室なんてぶち壊せ。鉢植え植物なんて枯れてしまえ」と書いてあるのは何のことかわかるだろうか。

だが、このような話をしながら著者は読者を徐々に自分の自然観に引き込んでいく。ネイチュアライティングの世界である。(松丸秀夫)

レベルアップの成果を問う

第一回写真展

アルパイン・フォトビデオクラブ

写真撮影は広く一般に普及して、これにも手近な記録の手段である。

しかし、その成果を世に問うとなると、あるレベルの障壁があつて、かつその高さが判然としないむずかしさが



28名の会員が腕自慢の作品70点を出展

存在している。

本会の中に同好会「アルパイン・フォトビデオクラブ」ができて一年半が過ぎた。前記の写真障壁を越えている熱心者少数と、然らざる多数からなる。

第一回の写真展を平成五年十一月二十一日二十九日に、西新宿の三省堂ホールで開催した。出展作品は七十点、作者は二十八名、来場者は推定で五百名強であった。

日本の山、海外の山、春夏秋冬にわたり、前記の写真障壁をクリアした。これは本クラブの羽田代表の努力によるもので、忍耐強く手をさしのべていただいた。

文章の世界で「ネイチュアライティ

ング」が盛んなように、写真でも「山岳写真」をもちたてていくよう心を新たにした。

最後に会場を提供していただいた三省堂流通センター社長・鈴木耕治氏に深甚の謝意を表します。

〔出展者〕赤羽昭夫、荒井紀雄、石井恵美子、石田要久、上北和夫、梅本知栄子、織田沢美知子、小山睦子、川嶋新太郎、北村義男、小林碧、小松原一郎、佐々木康之、渋谷千秋、鈴木章久、田辺史、所彰、西川昭一、中村静雄、羽田栄治、原田衛、松本恒廣、松丸秀夫、三上勝宜、南川金一、森宏子、山口俊輔、驚崎好 (松丸秀夫)

'93晩餐会・懇親山行

「弘法山」

集會委員会

十二月五日、鶴巻温泉駅に集まった参加者は百十一人。心配した天候も薄曇りから晴れになり、まずは安心した。駅から吾妻山の稜線を見れば、散り残った紅葉が美しい。それぞれ受け付けをすませ、色別に班を四つに分け、地元在住者の案内により出発する。

行程は一時間半ぐらいいで、弘法山から権現山へと落ち葉を踏みしめて歩く。途中善波峠への道も見送り、多少の汗ばみを感じながら、ゆっくりと登り下

◆山研改築収支報告◆

山研改築特別委員会

多数の会員のご協力をいただいて完成した新しい山研は、開所以来大変な好評で、平成5年の利用者は795人に達しました。その後の手直しがほぼ終わり、建物の登記も済ませたところで、昨年12月4日、山研改築特別委員会を開いて総括を行い、委員会を解散いたしました。

ここで収支の概略を報告します。自己負担金の内訳は、会員募金および山岳会負担金です。支出はこの外に、募金経費、旅費、上棟式、竣工式の費用などが上乗せになりますが、総て一般会計で処理されています。

(1) 収入の部 (単価 円)

項 目	金 額
日本自転車振興会補助金	59,913,000
自 己 負 担 金	60,414,000
合 計	120,327,000

(2) 支出の部

項 目	補 助 金	自己負担金	計
建 築 費	52,300,000	52,700,000	105,000,000
暖 房 設 備 費	2,000,000	2,000,000	4,000,000
上下水道設備費	2,500,000	2,500,000	5,000,000
初度調 弁 費	3,113,000	3,214,000	6,327,000
合 計	59,913,000	60,414,000	120,327,000

十一月十三日(土)午後一時から四時まで、表記の会がルームで行われた。中村副会長の司会で始められ、原委員長、長の挨拶のあと、織内名誉会員により、講師紹介が行われた。

「戦前の北アルプス」

資料委員会

中川喜久雄会員講演と映画の会



権現山山頂は111人で大にぎわい

中川会員の講演要旨は次のとおり。
一、私の生まれは江戸川区。府立園芸学校の寄宿舎の二階から、雪の富士山や丹沢を眺めて感激した。
二、東京農大を卒業して、千葉の官立松戸高等園芸学校に勤めていたとき、生徒らと初めて燕・大天井・檜沢(喜作新道はまだなかった)―檜―穂高を

この日上映された中川氏撮影の8ミリフィルムは次の四本である。
・穂高スキー登山(昭和16・3)
・天狗コル・奥穂高(昭和15・9)
・乗鞍スキー登山(昭和16・3)
・剣岳の岩登り(昭和16・7)
フィルムの保存は優秀で、十分観賞に値する。最初の三本には上條孫人、丸山信忠、四本目には佐伯平蔵、志鷹光次郎も登場し、資料的にも貴重なフィルムである。

「中川会員は大正十一年四月に、十九歳で入会された。会員番号は八一五番で、これは現会員中では二番目に若い番号である。九十歳になってすべてのことから解放されたいと、本会に退会を申し出られたが、本日私どもの勧めにより、会員を続けてくださることにした。」

りの道を行く。
このコースは、楽しいこと、懇親会を大勢で行える広場のあること、条件さえよければ富士の眺めを楽しめることなどで選んだ。もちろん参加者は北海道支部より宮崎支部の全国から集まって、楽しい思い出を作ることである。
権現山へは十二時過ぎにはほぼ全員集まり、班ごとに思い思いに円陣を作って昼食となる。地元の銘酒「白笹つづみ」と「名産落花生」を全員に配って賞味してもらった。食事後、記念写真にと全員を集めるのにガヤガヤニコニコと大騒ぎ。集まったところで中村副

会長から挨拶、そしてシャッター押しといふもの行事。
いよいよイベントのジャンケン勝ち抜き戦。賞品は貴重品の「米」ともなれば熱の入るのもまた一段と高まる。グループごとの決勝戦はタイコ、ドラの音もにぎにぎしく興奮は最高潮になる。その後「春の穂高」を合唱して、「鬼のパンツ」の踊りと合唱を集会メンバー全員で行う。そこへ岩手支部諏訪さんの飛び入りで迷舞踊が始まり、鬼のパンツも脱げるほどの爆笑が広がる。最後は「いい湯だな」を全員が輪になり、諏訪さんの振り付けで合唱し

踊って幕を閉じた。
権現山で解散し、それぞれ駅や温泉へと向かった。地元の西川、浜田、福田、本間の皆様、ご協力ありがとうございました。参加者名は省略させていただきます。(吉田実 写真・小倉厚)

□資料寄付のお願い□

登山の用具、記録など、整理するとき考えてみてください。他に寄付する前に山岳会へ。捨てる前にも再考を。

資料委員会

縦走し、登山の楽しみを覚えた。

三、田部重治の「日本アルプスと秩父巡礼」を読んで感銘を受け、矢も盾もたまず、日本山岳会に入会した。

四、一週間程度の山行に月に何回も出かけたこともあり、百円以上の小遣いになって母に出してもらった。母には今でも感謝している。

五、スキーは山に登るための道具と考え、もっぱらキックターンと斜滑降、ときどきシュテムボーゲンであった。

六、八方尾根では民家に八十銭くらいで泊めてもらったりしたが、現在の民宿のはしりといえよう。

中川会員は歌も楽しめたようで、深田久弥作詞の長い歌詞の「ヒュッテの夜」も元気に独唱された。

【出席者】中川喜久雄、織内信彦、平山武志、中村純二、穴田雪江、梅野淑子、原謙一、平井拓雄、佐藤知恵子、遠藤泰孝、南川金一、岡野修、内藤勇、春山政衛、開発秀三、吉田雅子

(開発秀三)

自然観察山行

山の破壊を見る―武甲山

自然保護委員会

前日から降り続いた雨も当日の朝にはあがり、西武秩父駅からタクシーで生川まで入り、表参道コースで武甲山頂上に登る。

かつては奥武蔵の名山といわれた武甲山一三三六メートルも、全山石灰岩の山であるため切り崩され、現在は一三九五メートルの高さになっているが地上から見る山の姿と、頂上から切り崩している頂上部分を見下ろすのでは、だいぶ受ける感じが異なった。

あと五十年くらいで山の形が完全になくなってしまふとの説もあるが、人間が発展するために必要とはいえ、考えなければならぬ問題である。

下山は浦山口駅の道をとったが、このコースの登山道のゴミを拾って歩いた結果、一番多かったのは小さなアメ袋とジュース缶のプルトップの金具だった。山を歩くときには、捨てなくてもよいものを持っていてもらいたいものである。

【参加者】岩崎、遠藤、神谷、羽賀、原田、渡辺、山口、須藤、上野、北村、篠原(英)、篠原(義)、田宮、古市、井上(千)、井上(希)、広田、横山の十八名。

(横山 隆)

次代に残そう美しい山と溪

第三十回皇居一周マラソン大会

OB・OGも参加して盛会

学生部

去る十一月十四日、恒例の皇居一周マラソン大会が開催されました。当日は前日からの雨もあがり、第三十回記念大会ということで、青年部や「山と溪谷社」からも団体戦への参加がありました。さわやかに楽しく走り、盛会のうちに終了することができました。

■団体戦(走者四人、各人一週計四周)

一位 早稲田大学 七六分〇六秒

二位 立正大学WV部 七七分二二秒

三位 成蹊大学A 七八分二六秒

以下、上智大学、法政大学A、青年部

■個人戦男子(一人三周)

一位 村田文祥(都立大学・五九分一三秒)

二位 田中清隆(上智大学・五九分三三秒)

三位 原田昌幸(学習院大学OB・六〇分三五秒)

〇分三五秒

■個人戦女子(一人二周)

一位 大窪三恵(明治大学・四九分四七秒)

二位 恩田真砂美(上智大学OG・五

〇分二八秒)

三位 高橋良子(成蹊大学OG・五二

分一〇秒)

なお、本大会に多くの企業から賞品の寄贈を受け、また日本山岳会の団体各位からもご協力をいただきました。

分一〇秒)

この誌面をお借りして厚くお礼申し上げます。

(椎名厚史)

■協力企業 ICI石井スポーツ、アウトドアスポーツ風魔、(株)アクシース

クイン、アポロスポーツ、(株)アライテ

ント、アルパインツアーサービス(株)、

(株)エキスパートオブジャパン、(株)エバ

ニュー、大倉スポーツ用品販売(株)、大

塚製菓(株)、(株)オクラス、尾西食品(株)、

片桐、カラファテ、キャンピングガス

(株)、コサ・リーベルマン(株)、ゴールド

ウィン(株)、さかいやスポーツ、サロモ

ン&テラーメイド(株)、三信製織(株)、

山友社たかはし、秀山荘、日本用品(株)

タカダ貿易、(株)ダナージャパン、(株)ダ

ンロップ、(株)デバック、(株)チヨロバザ

ール、テムポ化学、(株)白山書房、パタ

ゴニア日本支社、ミヤコススポーツ(株)、

むさしの山荘、モンベル、山幸、山と

溪谷社、ユニバーサルトレディング

(株)、ヨシキスポーツ(五十音順)

会務報告

十一月定例理事会

日時 十一月十一日(木) 十八時三十分～二十時五十分

場所 日本山岳会会議室

出席者 藤平会長、嶋原・中村副会長、小倉・大倉・村井・山口・片岡・南川・伊藤・南井・堀井・渡邊・溝口・中川・山本・大谷各理事、中島・川崎各監事、西村・宮下、神崎各常任評議員

〔委任〕大森、松浦、水野各理事、斎藤、湯浅、重廣各常任評議員

議事に先立ち、明治学院大ツインズ登山隊・伊丹氏、立教大チョモロンゾ登山隊・山野井氏から帰国の挨拶がある。

◆議事

〔審議事項〕

一、青森支部設立について 小倉
本日の理事会の承認により、十一月二十日設立総会の運びとなり、藤平会長、松田前副会長、小倉常務理事が出席する。記念山行は五月に予定。承認
二、慶大「トランゴ・タワー」都岳連への推薦状について 小倉

「慶大山岳部創立八十周年記念・トランゴ登攀チーム一九九四」への推薦状の要請がなされた。承認

三、委員の追加増員について
山研委員 浜崎一成、総務委員 吉

川隆士

承認

四、*「遠く、高く」大西宏遺稿・追悼集」に「山岳」および「会報」の記載文の掲載について 承認

*「日本の創造力」近代、現代を開化させた四〇〇人」NHK発行(河童橋のウエストン)の写真掲載について、名義と一冊寄贈で 承認

*「会報」掲載の「山と自然の断章」(岡村治信会員)の「法曹」に掲載について 承認

五、山研に関する取材について 小倉

(※全国競輪施行協議会のPR誌新年号に、当会関係の補助事業「山研」「自然保護」「中高年全国大会」の取材申し込みがあり、協力する。承認

〔報告事項〕

一、小島島水レリーフについて 小倉

お茶の水時代のルームに掲げてあったレリーフについて望月名誉会員から質問があったが、現在図書室に保管されており、後日、山研に掲額する。

二、評議委員会報告 藤平会長

本年度の名誉会員は前会長山田二郎氏に決定。年次晩餐会で発表。

三、UIAAアジア会議 神崎

十一月六日会議の席で「アジア山岳連盟」設立が要請され、イラン、パキスタン、ネパール、香港、中国、中華民国(台湾)、韓国、日本の八か国十団体で発足した。

四、山研報告

溝口

①平成五年度(四〇十月)山研利用者合計七九五入。

②十月三十一日、広中環境庁長官来訪。

③自転車振興会より来年五月の実地検査で完了する。

④山研特別委員会は十二月四日の支部長会議前に会計報告等を行い解散する。

(振興会対応は別途)

五、年次晩餐会について 中川

本日までの出席申し込みは三三九名。

懇親山行七十七名。支部長会議の議題は九十周年記念事業ほか四件を予定。ス

ケッチクラブ絵画展は六十点を展示。

六、プラスチック・ブーツ 小倉

重廣会員からの要請により、メンテナンスについて「山」十二月号に広告として掲載することとした。

七、チベットの登山協会からの募金申し入れについて 藤平会長

チベット登山協会は一九九三～二〇〇〇年に八〇〇メートル峰十四座登頂を計画しているが、このための装備

資金の後援を要請している。本会としては小倉常務理事をキャップに、高所、

海外、遭対で対応する。

八、雪氷学会の社団法人登録・記念パーティーが十一月十五日開催される。

小倉常務理事が出席。

九、高所登山研究委員会から 渡邊

十二月三日ルームで開催する。議題

は「マカール・峰登山計画の取り組み」。

九十周年記念登山は中国登山協会、チベット登山協会から十月六日付けで許可の内諾があった。

十、海外登山基金委員会報告 嶋原

平成四年度助成の四隊の登山概要を報告。詳細は「山岳」第八九年に掲載。

〔各委員会報告〕

●青年部 ①第六回青登懇打ち合わせ(十月二十一日)②例会(十一月四日)

③第七回青登懇打ち合わせ(十一月八日)。

●学生部 人工壁クライミング・コン

ペ、十二月三日、PUMPスポーツクライミング・センターで。

●自然保護専門委員会 ①「山の自然

現地講座」申し込み者約一〇〇名。月一回で一年間続ける。②腕章、参加票

パンフレット等に「日本山岳会・地球環境基金」の文字を入れる。

●図書委員会 十月二十八日、山の本シリーズ「山岳図書・古本屋の舞台裏」を開催。盛会であった。

●資料委員会 ①上高地山研資料室閉鎖(十月三十～三十一日、越冬、梱包等を行った)②十一月十三日、中川喜

久雄会員の講演を予定。

●フィルム・ビデオ委員会 ①十月十六～十七日、宝剣岳で撮影会、二十五

名が参加。②十一月二十～二十九日、

第一回アルパイン・フォトビデオクラ

ブの写真展を支援する。③一月にルームで山岳スキー映画会を予定。
◆新入会員承認 平山英治他二十四名。

・ルーム日誌

(11月)

1日	連絡委員会	遭難対策委員会
2日	総務委員会	スケッチクラブ
4日	学生部	青年部
8日	青年登山懇談会	アルパイン・スキークラブ
9日	二火会(前女懇)	
10日	集会委員会	フィルム・ビデオ委員会
11日	理事会	
12日	学生部	
13日	資料委員会	
15日	総務委員会	資料委員会
16日	フィルム・ビデオ委員会	指導委員会
17日	三水会	
18日	学生部	
19日	自然保護専門委員会	
24日	青年登山懇談会	
25日	学生部	
26日	青年部	高所委員会 海外委員会 指導委員会 学生部
29日	総務委員会	集会委員会
30日	自然保護委員会	アルパイン・スケッチクラブ

11月来室者572名

INFORMATION



カット 窪寺健之

◆「台湾交流登山団」参加者募集!!

中華民国山岳協会との親善をかねて、海外登山を実施します。会員諸氏のふるっての参加を希望します。

日時 平成六年四月十八(金)〜二十三日(水)の予定

対象コース ①雪山(三八八四メートル) 登高班 ②合歓山(三四一六メートル) 軽登山班

団長 藤平正夫会長

費用 概算一三万円(実費精算)

申込 平成六年二月十五日までに葉書に、氏名、住所、生年月日、パスポート番号、職業、希望コースを記入の上、山岳会内・海外連絡委まで送付。詳細は電話〇三・三四八五・五三七八 木村まで。

◆アルパイン・スケッチクラブ展

恒例の展覧会を、交通会館で開催します。ご来場をお待ちしています

日時 平成六年二月二十七日(日)〜三月五日(土) 午前十一時〜

午後七時(二十七日は午後一時より、五日は午後五時まで)
東京交通会館2Fギャラリー
JR有楽町駅北口駅前、地下鉄有楽町線有楽町駅直結出口A8

◆シンポジウム予告

自然保護委員会・丹水会

山の自然保護を考えるⅡ―丹沢―
日時 平成六年四月十六日土 十三時十五分〜十六時十五分

場所 神奈川県秦野市民会館小ホール

シンポジウム終了後、希望者は山麓に泊まり、十七日(日)に自然観察山行を計画しています。詳細は次号に掲載。

◆「木の目草の芽」創刊のお知らせ

自然保護委員会

昨秋から自然保護情報を中心としたミニコミ誌「木の目草の芽」を発行しています。隔月刊で、現在第三号まで刊行しました。購読ご希望の方は、一年分として八十円切手十枚を同封の上、日本山岳会自然保護委員会ミニコミ部会までお申し込みください。

◆「H・C・サリン」さんを支援する会」報告

平成四年夏発足、ご協力をお願いしておりました「H・C・サリン」さんのライフワークを支援する会」は、五年八月末日をもって募金口座を閉鎖しました。ご寄付いただいた方は一〇八名、金額は歓迎会費を含めて二〇〇万円を超し、I S I C(インド脊椎障害者センター)への寄付一五〇万円のほか、四年十月末日の際の滞在費・航空券の一部に充当させていただきました。遅くなりましたが、収支をご報告し、ご協力に心からお礼申し上げます。

(同会事務局)

■会員異動

▼物故 西方昇(二〇七四九) 4・4
・29 横山八郎(二七八〇) 5・6
21 工藤信男(五七七三) 5・8 佐藤正倫(一〇一五六) 5・10 18 片桐理一郎(五〇四八) 5・11 17 中尾佐助(四〇〇二) 5・11 20 ▼姓名変更 備前和子(二〇三二九) ↓斎藤和子 林嘉代(二一四六二) ↓塩谷嘉代 ▼除籍取り消し 本田伸良(一〇五〇四) ▼退会取り消し 中川喜久雄(八一五)

■訂正とお詫び 十一月号(No.五八二)十ページ下段の大塚利子を和子に訂正。

日本山岳会報 山 584号

1994年(平成6年)1月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会
〒102 東京都千代田区四番町
5-4 サンビュウハイツ
四番町
TEL 東京(03) 3261-4433
振替口座 東京 3-4829
発行者 藤平正夫
編集人 伊藤 敏
印刷 株式会社 技報堂